

シリーズ 今、世界史で何が議論となっているのか⑥

# 世界史は「エモい」?

## ——感情史の可能性

森田 直子

**感**情史(History of Emotions)は、この四半世紀ほどの歴史学界で議論されてきた新しい研究手法の1つである。2019年にイギリスで出版された論集『歴史学の新しいアプローチを討論する』でも、グローバル・ヒストリー、環境史、ジェンダー史に加え、ポストコロニアル・ヒストリー、記憶の歴史、デジタル・ヒストリーなどと並んで感情史があがっている<sup>①</sup>。この論集に寄稿した者の多くは欧米の歴史家であり、内容も歴史学を専門に学ぶ学生(から上のレベル)に向けたものとなっているため、日本の高校世界史に感情史という話題をもち込むのは無理があると思われるかもしれない。しかし、世界史の教科書ではすでにグローバル・ヒストリーや環境史、ジェンダー史を意識した叙述がなされている。感情史にもその可能性があるのでないか、というのが本稿の挑戦的なメッセージである。

①M. Tamm and P. Burke eds., *Debating New Approaches to History*, Bloomsbury Publishing, 2019.

### 感情史は「エモい」?

昨今、多数の高校生が各大学のオープンキャンパス(OC)に参加する。私も文学部史学科の教員として10年以上OCに関与しているが、近年は模擬授業のテーマに感情史を掲げることが多い。直近の模擬授業でも250人近い生徒たちを前に、「ひとは悲しいから泣くのか、泣くから悲しいのか——感情史をひもとく——」というタイトルで話をした。その際、スマートフォンで簡単に答えられるアンケート機能を用いて、「感情史」という単語をこれまでに聞いたことがあったか、「エモい」という表現を使うか」と参加者に問うてみた。前者の問いには8割が「ない」と答え、後者の問いは、「自分も使うし、周りも使っている」で5割以上、「自分はほとんど使わないが、周りは使っている」をあわせると優に8割をこえた。大半の高校生にとって「感情史」が未知なのは明らかである。しかし、「感情史」という言葉を聞いたことがあると答えた2割という数字も看過できない。ほとんどがインターネット上でこの単語をみかけたとのことだったが、学校の先生などから聞いた、と答えた生徒も数人いたことは特筆すべきだろう。

また、英単語のemotion/emotionalに由来するとされる「エモい」という表現は、三省堂が実施する「今年の新語」で2016年に第2位になった前後から、実際に学生が

口にするのを耳にするようになった。それ以来、彼らがどのような場合に「エモい」を使用するのか何度かアンケートしてみた。網羅的な調査ではないため印象論にすぎないが、それは感情が心地よくゆさぶられた時に感嘆詞のように使われ、危機的な状況だけでなく感動的な状況にも用いられる「ヤバイ」という表現に近いもの、ポジティブながらどう表現すべきかわからないモヤモヤした感情の表れ、とみなしてよさそうである。いずれにせよ、この10年弱で「エモい」という言葉は一定の地歩を固めたようだ。

一方、つぎのような話も耳にする。思いがけない喜びをもたらす「サプライズ」を敬遠し、映画などを観賞する前にその顛末を知らされる「ネタバレ」を歓迎する若者が増えている、と。彼らは生まれた時から災害や不況に見舞われ続けたため、結果がわからないことへの不安や恐怖の感情が強く、感情を大きくゆさぶられたりドキドキしたりするのが苦手で、情緒の安定や安心を重視する傾向にあるからだそうだ。その当否については議論の余地がありそうだが、総じて自身や周囲の人々の感情に敏感な若者が増えているという印象は否めない。感情が優しくゆり動かされるのはエモくても、激しくゆさぶられてしまうのは苦手ということなのだろうか。

ともあれ、以上のような背景を念頭におくなら、生徒や学生が「感情史」に関心をもったとしてもおかしくはないだろう。実際、感情史についての概説的な授業への学生の「食いつき」はよい(気がする)。また、OCでの模擬授業後に複数の生徒が質問にきてくれるのも、(私がおこなった)ほかのテーマではありえなかったことである。感情に着目する歴史としての感情史は、今の若者にとって「エモい」ものなのかもしれない。

## 『エモい世界史』

こうした文脈で注目すべきなのが、2021年に出版され、2023年に『エモい世界史』というタイトルで邦訳された著作である<sup>②</sup>。著者ファース＝ゴッドビヒアは、感情史研究の拠点であったロンドン大学クイーン・メアリ校において、嫌悪感情についての論文で博士号を取得した人物だが、本書は一般向けに執筆されたものである。邦訳タイトルが「軽すぎる」せいか、学生から「これは感情史として読むべき本なのですか？」と懐疑的に聞かれることもある。結論からいえば、本書は世界史と感情史のハイブリッド例、しかも成功した例である。その理由は本書の特徴をみることで浮かび上がってこよう。

『エモい世界史』の第一の特徴は、古代ギリシアに始まり、古代インド、中世ヨーロッパ、近世ヨーロッパから北米植民地、帝国の時代、第一次世界大戦、中華人民共和国の誕生、米ソの対立へと、世界史の教科書の流れと近似した章構成であることだろう。つまり、時代順に並んだ各章は特定の地域のできごとにフォーカスして叙述されているのだ。世界史を学ぶ意義の1つが、世界全体を数千年にわたって俯瞰することにあるとするならば、同じ時空を教科書とは異なる視点でめぐる本書は、有用な副読本になりえるだろう。本書の原題は“A Human History of Emotion”、直訳すれば『感情(について)の人類の歴史』であるが、内容に則して『感情(について)

②リチャード・ファース＝ゴッドビヒア(橋本篤史訳)『エモい世界史——「感情」はいかに歴史を動かしたか』(光文社、2023年)。

の世界史』とした方がわかりやすい。

もちろん本書の主要な特徴は、タイトルの前半、「感情(についての)」という部分にある。私たちは「感情」という言葉を、その時々を生じる喜怒哀楽など個々の気持ちや情動を表す際にも、知性・理性・意識などと区別される、快・不快などの気分を含めた情緒全般を指す際にも用いる。だが、こうした用法や理解自体が決して普遍的ではなく、「感情」のとらえ方そのものにも歴史がある、ということを書き教えてくれる。第1章の冒頭近くでは、「古代ギリシア人は感情のことを「経験」や「苦しみ」を意味する「パトス」と呼んだ。……プラトンは、パトスとは魂の動揺であり、外界の出来事や感覚によって生じたさざ波が人間のバランスを崩し、平静を乱すものと考えた」(p.19)とあり、第8章になってようやく、現代の心理学の対象となる「感情」が生まれ、1500年代から存在したemotionという単語が、私たちの用いるような意味になった過程が示される。本書はつまり、「感情」という言葉や概念についての世界史という側面をもつ。

### 『エモい世界史』——愛と怒り

それと同時に、ほとんどの章では特定の感情に着目し、それが歴史的なできごとにもどう影響したかが描かれる。十字軍を扱う第4章を例にとろう。高校世界史では、十字軍運動が西ヨーロッパや西アジアの社会に与えた影響を多面的に理解することに重心がおかれている。十字軍組織のきっかけについては、イスラーム勢力に聖地エルサレムを奪われたビザンツ皇帝からの救援要請にこたえるべく、教皇ウルバヌス2世がクレルモン宗教会議を開いて聖地回復のための聖戦を呼びかけた、と説明されるのが一般的だろう。もし、その背景に何らかの感情が作用したとするなら、イスラーム勢力への怒りや恐怖だろうか。しかし、『エモい世界史』の著者はいう。「十字軍といっても実態はさまざまであり、なぜ起きたのかはいまだに多くが謎に包まれている。ただ、私が思うに、十字軍が扇動された理由についてはそれほど不可解な点はない。そこには“愛”が関係している。そう、愛が。」(p.94)

ここで大半の読者は意表を突かれ、「愛」という感情と、領土回復をめざして殺しあう戦争がどう関係するのか知りたくなるのではないか。本書では、現代の神経科学が定義する愛と対比させて、「十字軍の時代にヨーロッパを支配していた感情体制の根幹」であった愛、「十字軍の戦士たちが抱きどころ」とした愛が説明される。それは要するに、神への奉仕の愛、神に到達する手段としての愛である。そうした愛は現代の非キリスト教徒にとっては理解困難だが、当時、クレルモンの大聖堂に集まった大司教や修道院長、騎士、貴族などには共有される感情だった。そして、そのことを熟知していたウルバヌスは、「最愛の兄弟たちよ“beloved brethren”」と演説を始めたそうだが、この呼びかけこそ、共通の敵に立ち向かうキリスト教徒の同胞の兄弟愛、神に達する手段としての愛という感情を利用するものだった、と著者はいう。この仮説はより丁寧な検討を要するだろうが、十字軍というきわめて大きな社会的影響をもったできごとを、その当時の愛という感情で説明しようとする試みは非常に興味深い。

もう1つ例をあげよう。第10章は19世紀末にイギリスによって植民地化されたアフリカ黄金海岸の一部が舞台である。本章の主演であるアシャンティ連合王国に言及する現行の高校教科書はなさそうだが、複数の資料集には小さく載っており、アシャンティとイギリスとの戦争が世界史上のできごとであったことは間違いない。ここでクローズアップされるのは、アシャンティ連合の一国家エドウェソの王母ヤァ＝アサンテワァの怒りの感情である。彼女の怒りは、アシャンティのもっとも重要な権力の座である黄金の床几しじきを奪おうとしたイギリス人の横暴な振る舞いに向けられた。状況からして彼女が怒りを感じたのは当然だが、具体的にそれはどのような怒りで、いかなる結果をともなったのか。

著者によれば、「ヤァ＝アサンテワァは胸から雑草が飛び出すほどの熱い怒りを覚え、それを民衆に広める必要性を感じた。当然ながら、彼女の怒りは、怒りと悲しみをこらえるアシャンティの族長たちに伝染した。……王母としての地域の王族のモジャと、父方の反抗的な人のントロを持っていてであろう彼女は反抗心にあふれていた。彼女が爆発することでみなのおクラがかき立てられ、反乱が始まったのだ。」(p.239)——何が書かれているのかさっぱりだろう。「胸から雑草が飛び出す」というのは、ヤァ＝アサンテワァが話していた言語であるトゥイ語における感情表現とされる。また、強いて訳語をあてるなら、モジャは血、ントロは精液、オクラは魂となるようだ。それぞれがもつ独特の意味合いを理解するのは難しいが、重要なのは、みずからが属す文化の文法に則って——感情体制に従って——彼女が強い怒りを表したため、アシャンティの人々の心と身体を動かし、イギリスに対する反撃に出て敵を大いに苦しめた、ということである。残念ながらアシャンティは敗北し、イギリスの配下となったが、黄金の床几は守り抜かれたという。

## 感情史とは？

『エモい世界史』は、感情がいかにかに歴史的事象に影響し、ひいては世界をつくったのかを可視化し、感情なくして歴史は存在しないという著者の信念を具現するものである。では、「感情(について)の」歴史が感情史なのだろうか。これに答えるのは、感情史とは何かという本質的な問いと関係するため一筋縄ではいかない。とはいえ、「感情」のとらえ方の変遷(歴史)や「感情」を表す言葉や概念の変化(歴史)、愛や怒りなどの感情が人々を動かして記憶と記録に残るできごと(歴史)となったとする見方、これらもまた感情史である、というのが私の目下の答えである。感情史研究の第一人者で、感情史の入門書『感情史とは何か<sup>③</sup>』を著したバーバラ・H・ローゼンワイン自身、『初期中世の感情の共同体』といった研究書だけでなく、愛や怒りについて的一般向けの歴史書も著している。後者は『怒りの人類史<sup>④</sup>』という邦題だが、内容的には『怒り(について)の世界史』である。

さらに、十字軍の例では一次史料の「最愛の兄弟たち」という呼びかけの言葉に注意が喚起されているが、単なる決まり文句として捨象されがちな呼びかけの言葉に込められた感情を読み解くのは、感情史研究では重要な手段である。また、ヤァ＝アサンテワァの例でも、言語学に依拠しながらトゥイ語の表現に着目したり、黄

③ バーバラ・H・ローゼンワイン／リッカルド・クリスティアーニ(伊東剛史・森田直子・小田原琳・館葉月訳)『感情史とは何か』(岩波書店、2021年)

④ バーバラ・H・ローゼンワイン(高里ひろ訳)『怒りの人類史——ブツダからツイッターまで』(青土社、2021年)。

金の床几のようなモノを手がかりに彼女や周囲の感情にせまるが、当事者の感情について書かれた史料がない場合——歴史的にはそれが常態である——、こうしたやり方は不可欠である。その意味でも、『エモい世界史』は感情史の一例と認められよう。

## 感情史の可能性

『エモい世界史』や『怒りの人類史』のような感情史の著作は、読物として成功していればなおさら、世界史への間口を広げることに寄与するだろう。それだけではない。冒頭で言及した通り、グローバル・ヒストリー、環境史、ジェンダー史は、高校世界史でも強く意識されている。そもそもそうした研究手法が登場し洗練されてきたのは、歴史学に内在する事情のみと関係するわけではなく、歴史学にたずさわる者を取り巻く世界と切り結ぶものがあるからこそという側面が強い。現代社会に生きる私たちはグローバルなものを見方をせざるをえず、環境問題やジェンダー問題とも向きあわざるをえない。だからこそ、そうした背景から誕生した歴史学の成果が、教科としての歴史にも積極的に反映されてきたのだろう。

感情史の登場もまた、感情・情動に関する科学的知見の飛躍的な進展、それらに対する一般の関心の高まりや理解の深まりと切り離すことはできない。日本においても、「心の知能指数(emotional intelligence Quotient)」、感情労働、エンパシー(共感力)やアンガーマネジメントなどの言葉が広まり、気分の落ち込みなどが情動の障害としてとらえられケアの対象となる一方、感情——とくに幸福などのポジティブな感情——を自分のものにできるのが人生の成功者であるという強迫観念のようなものが蔓延しているようにも見える。つまり、私たちは良くも悪しくも感情を意識せざるをえない世界に生きているのだ。そうだとすれば、感情史は、先にあげた歴史の研究手法と同様、現代社会において一定の要請があり、意味をもつものとみなされえよう。

さらに、国内外の歴史博物館には、歴史上の人物などへの感情移入を通して過去の世界によりリアルにせまろうとする没入型の展示が増えているようだ<sup>6</sup>。一步先を行くゲームや娯楽映画における高度な没入感を可能にする技術は、歴史展示にも——デジタル・パブリック・ヒストリーという形で——影響を与えつつある。教室に座って年表を暗記するだけが歴史なのではなく、たとえば、サイバー空間で過去に生きた人々の視聴覚を追体験したり、歴史の現場におもむいて実際の道のりや装具の重さのみずからの身体で経験したりすることも歴史への入口となる。それらは無色透明なものとして体験されるのではなく、何らかの感情的な経験をともない、歴史的な想像力を働かせるのを容易にするからである。こうしたこともまた感情に着目した歴史研究の所産の1つとみなせるだろう。「歴史は結果がわかっている＝「ネタバレ」しているから感情が必要以上にゆさぶられなくて安心だし、自分たちとは異なる世界線としての感情体制を、サイバー空間で追体験しながら想像するのは「エモい！」——高校生にそう思わせる可能性を感情史は秘めている、といったら大げさにすぎるだろうか。

(もりた・なおこ／上智大学文学部准教授)

<sup>6</sup>一例としてつぎの紹介も参照。「無味乾燥な歴史を一気に変える「感情史」」(『IKUEI NEWS』2024年10月号(vol. 108)所収、<https://www.dentsu-ikueikai.or.jp/common/digitalbook/vol108/#page=19>(最終閲覧日:2024年11月7日))。